

寄り添う

外国由来の子どもたちと共に

前回お話ししたように、幼少期から低学年時に来日した子どもの多くは、日本語環境に身を置けば、自然とおしゃべりはできるようになります。周りからも「バイリンガルになれていいね」と思われがちですが、実はそう単純ではないようです。

小学校1年で来日したCさん(中国)。来日当初、日本語が全く分からず泣いてばかりいましたが、学校生活を送りながら個別の日本語支援を受け、基礎をしっかりと学びました。言葉の理解に比例して自信も持

てるようになったCさんは1年後、友達もたくさんでき、学校の授業が理解できる、つまり日本語で物事を

考えることができる本当の意味での

“バイリンガル”とはいうけれど...

“言葉の力”もつきました。

このように、本来子どもが持っている言語習得の力と努力、周りのサポートで幼い子どもの日本語はぐんと伸び、一緒に来日した親たちより流暢に話せるようになります。そ

の一方で、母語(初めに自然習得した言語)を簡単に忘れてしまうのも子どもならではです。

そうした子どもたちは、日本で不自由なく暮らせるようになった反面、思春期に大きな壁に直面するかもしれません。その一つの例が

“親子間の深い会話が成り立たなくなる”ことです。気持ちを丁寧

に取りする必要がある会話、例えば高校進学など将来を決める大切な話が親子間でできなかつたり、日本語が話せない親を馬鹿にしてしまい、親と信頼関係が築けなかつたりとい

った深刻な事態に陥ることも時にあります。

先ほどのCさんの家庭では、母語である中国語も大切にしようとする家庭では中国語を話し、時には中国語の読み書きも教え、また寝る前には中国語でお母さんが読み聞かせもしています。ご両親は、子どもの将来のために日本語だけでなく、母語と母文化も大切にしてい

います。

世の中では“バイリンガル”がもてはやされていますが、母語力を維持しながら日本語の力も伸ばすのはそう簡単なことではないのです。(松本市子ども日本語教育センター コーディネーター・栗林恭子)